

ことばの遅れのある幼児のことばを促す支援方法

宮下春菜

1.研究の目的と方法

発達障害の子ども、その疑いのある子どもは、今日の園にも必ず存在すると言われている。発達障害のある子ども、発達に遅れのある子どもへの支援を考えていく上で、私は「ことば」に注目した。発達障害の症状はその種類や程度によってさまざまであるが、その中でも共通して言える症状が「ことばの遅れ」なのである。今後保育に関わっていく身として、今現在、どのような支援が行われているのか、そして、今後どのような支援が必要となってくるのか、考えておく必要があると感じ、本研究を行った。研究方法は以下の通り。

- ・文献より ことばを獲得する過程、ことばの遅れの原因、発達障害との関係性について
- ・K市内の公立保育園2園（A園B園）、公立幼稚園2園（C園D園）、O市内の統合保育を積極的に行う幼稚園（E園）の計5園で働く先生方を対象に、ことばの遅れのある幼児への保育に関するアンケート調査を実施
- ・アンケート調査による考察と、先行研究、文献から、今後必要な支援方法を考える。

2.ことばについて

①ことばを獲得する過程

ことばを認識するための脳の機能が順調に働き（Language）、ことばを話すための発声器官がきちんと発達し（Speech）、そして「伝えたい」という気持ちが生まれた時（コミュニケーション）に、初めて発語へとつながる。

②ことばの遅れ

・ことばの遅れとは：ことばを獲得していく過程の中で、ことばが出ても良い年齢になっているにもかかわらず、ことばが出ないということ。

・ことばの遅れの原因（中川信子）

（1）難聴 （2）中枢神経系の問題 （3）発達速度の問題 （4）脳性まひ

③発達障害との関係性

- ・ADHD（注意欠陥多動性障害）
- ・LD（学習障害）
- ・自閉症スペクトラム（広汎性発達障害）
- ・精神発達遅滞（知的障害）

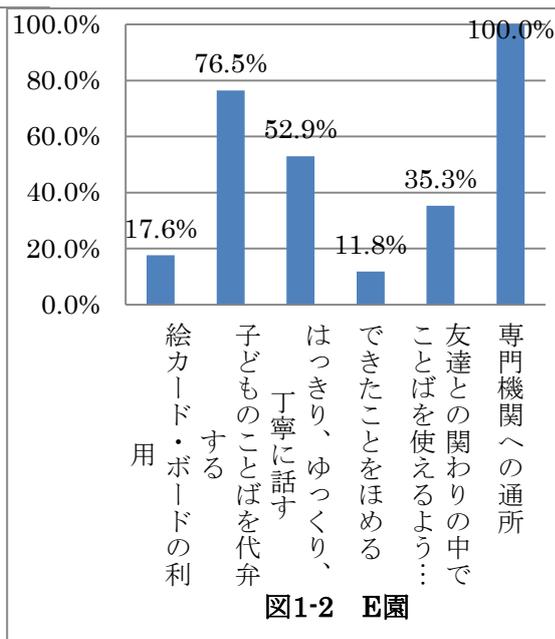
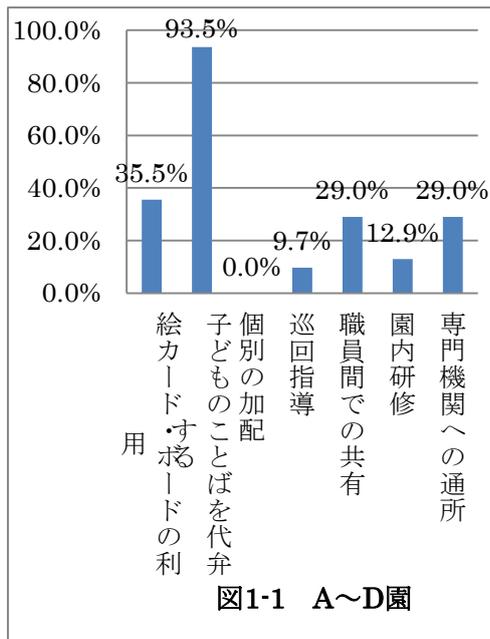
3.保育現場での実際—アンケート調査から—

(1)アンケート調査からのことばの遅れのある幼児とは

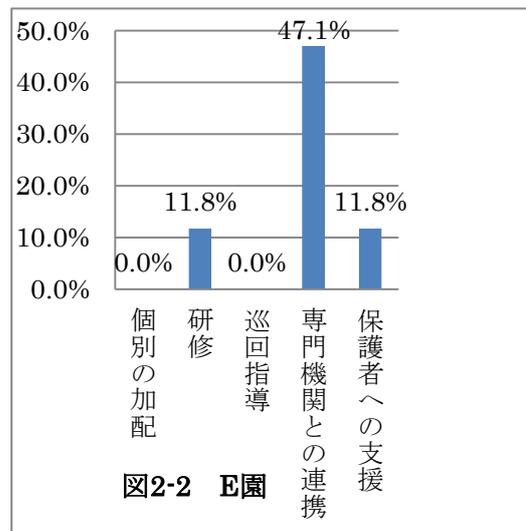
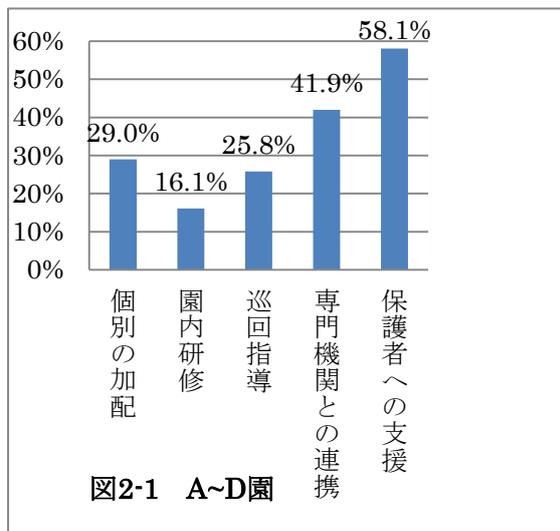
文献調査の中で、言葉の遅れと関係があるとされた発達障と、アンケート調査の中で、「ことばの遅れのある幼児は、障害名が診断されているか。」という質問への回答で出てきた障害名は、文献調査で挙げられたものと同じものだった。ここから、実際に発達障害とことばの遅れが関係しているということがわかる。

(2)アンケート結果と考察、(3)一般園と統合保育を積極的に行う園の比較検討

まず、ことばの遅れのある幼児がクラスにいる割合は、A～E園共通して9割近くのクラスにことばの遅れのある子どもがいることが分かった。また、障害の診断されている幼児は年齢が上がるにつれて、増えている。



園内で現在行っている支援（図1）は、日々の保育の中で、子どもの気持ち・伝えたいことを代弁するという点は5園共通して多かった。差が生じたのは、専門機関への通所であった。専門機関への通所が少ないA~D園は、今後必要だと思う支援（図2）で、専門機関との連携が2番目に多い。専門機関への通所が100%のE園も、専門機関との連携を必要としているという回答が多く挙げた。



4.ことばの遅れのある幼児への支援方法

(1)専門機関との連携とは一連携モデル

厚生労働省の推進する「連携モデル」

厚生労働省（補助）→ 各都道府県・政令指定都市（直接/委託）→ 発達障害者支援センター（連携）→ 関係機関・施設

<発達障害者支援センター>

①相談支援 ②発達支援 ③就労支援 ④普及啓発 ⑤研修 等の活動を行う。地域の人口や支援事業の状況によって、活動には地域差がある。

<関係機関・施設>

①知的障害児（通園）施設 ②療育センター ③医療機関 ④児童相談所 ⑤市町村保健センター

(2)保育現場との連携

- ・保育現場と専門機関の交流
- ・保育者の発達障害や気になる子についての知識
- ・保護者支援

(3)日々の保育の中で

専門機関による専門的な支援よりもまず、「ことばのビルを建てる暮らし」（中川）がすべての基礎となる。子どもが規則正しい生活を送り、十分に体を動かし、発達にあった運動を行うこと、周囲の大人や友達との関わりの中で情緒の発達が促されていくこと、身辺自立をすること、豊かな体験・経験をすることである。また、子どもをよく見ることで信頼関係が生まれ、話したいと思う「コミュニケーション」の部分が育つ。そして、園と家庭とが協力して、ことばの育つ環境を作っていくことがことばの育ちを促すために、最も重要なのである。

5.まとめ

ことばの発達を促すためには、ことばが表れることだけに重点を置いてはいけなと感じた。ことばが出るまでには、さまざまな過程を経て、あらゆる条件を満たす必要がある。ことばは思いを伝える「手段」であって、そのためには、子どもの伝えたいという気持ちを育てていかなければならない。子どもが話したくなるような環境づくりを、保育の場と家庭がしっかり情報交換をし、連携して行っていくべきである。また、保育者は、ことばの発達過程を知った上で、子どもを支援していかなければならない。アンケート調査から、保育者は、もっと専門機関の詳しい内容や、専門的な知識について、知りたいと感じているという結果も出ている。これらから専門機関との連携を進めていく必要があると感じた。

自分自身も保育者として、この研究で得た知識を生かし、さらに学びながら、これからの保育に取り組んでいきたい。

参考・引用文献

- ・中川信子『心をことばにのせて』1990年 ぶどう社。
- ・今井和子『子どもとことばの世界 - 実践から捉えた乳幼児のことばと自我の育ち -』1996年 ミネルヴァ書房。
- ・荒井良『脳と言葉』 社会思想社。
- ・中川信子『発達障害とことばの相談』2009年 小学館 pp74～82、pp100～104。
- ・中川信子『ことばをはぐくむ』1986年 ぶどう社 pp34～60、pp62～66、pp92～125。
- ・渡部信一・本郷一夫・無藤隆『障害児保育』2009年 北大路書房 pp96～106。
- ・中川信子『子どものころとことばの育ち』2003年 大月書店 pp32～42、pp70～80。
- ・白石正久・白石恵理子『教育と保育のための発達診断』2009年 全国障害者問題研究会出版部。
- ・茂木俊彦『障害を知る本④ ことばの不自由な子どもたち』1998年 大月書店。
- ・発達障害情報・支援センター <http://www.rehab.go.jp/ddis/>
- ・国立成育医療研究センター <http://kokoro.ncchd.go.jp/>
- ・甲斐睦朗 『ことばの力が育つ保育』2005年 保育出版社。